

ベルリン地域医療史 1871—1914 (Ⅲ)

西 尾 孝 明

はじめに

第1章 首都ベルリンの形成と市民生活

- (1) 首都ベルリンの都市像
- (2) 帝制時代のベルリン
 - ① 当時のベルリンの経済構造
 - ② 大ベルリンの形成と人口集中

第2章 帝制期ベルリンの市民生活

- (1) 年齢別人口構成と平均寿命
- (2) 市民生活と福祉状況
- (3) 都市空間と緑地（以上 第58巻第3・4号）

第3章 ベルリンの地域医療

- (1) 医療沿革史
- (2) 環境衛生の改善
 - ① フィルヒョーとその協力者
 - ② 運河の改修
 - ③ 住宅事情、上下水道事業と清掃活動（以上 第60巻第3・4号）
- (3) 近代的都市計画の進行と住宅政策（以下本号）
 - ① 「杜の都」ベルリン
 - ② 都市計画と住宅政策
- (4) 医療施設の充実と医療の向上
 - ① 医療体制の充実
 - ② 疾病保険制度の整備
 - ③ 医療の向上と市民生活

むすび

(3) 近代的都市計画の進行と住宅政策

① 「杜の都」ベルリン

ドイツは、こんにちでも、げに公園や緑地の多い国*である。全土の至る所にある森林 Wald は、八世紀ごろから未開・野獣などを意味する wald (mhd.) wald (ahd.) を語源としており、この民族が、父祖の時代以来、森を愛して来たことを物語っているが、既に第2章第3節(第60巻第3・4号)で簡単に触れたように、「杜の都」と言われる首都ベルリンは、まさにその象徴であり、その首都たるに相応しい都市であった。ハーヴェル河畔に臨むグルネヴァルト Der Grunewald や、ベルリナー・フォレスト Berliner Forest は、今日でも、雄大な景観と「緑の顔」grün Antlitz を、この町に与えており、この都市が森林の多い都市であることを印象づけている。戦前を知るものは、この都市が、新聞などで「伯林」と書かれていたことを思い出すであろう。伯とは長兄の意。「伯林」とは、誰の創意か、まさに絶妙の表記であった。

* ドイツがいかに森林の多い国であるかを、先ず示しておこう。最近のドイツは激動しているので、ここでは比較のため、やや古いが、旧両ドイツとも、同じ1979年刊行の統計資料から、当時の土地利用を掲げておけば、旧西独では、総面積 248,643,000 ha 中、農地 140,915,000 ha (56.7%), 森林 73,175,000 ha (29.4%), 湖沼 4,245,000 ha (1.7%), リクレーション用地 1,225,000 ha (0.5%)⁽¹⁾ である。また旧東独では、由来、1970年の土地保全法 Landes Kultugesetz によって、森の利用と保護(22—23条)、湖沼・河川の利用と保護(24—28条)、空気の浄化(29—31条)などが規制されていたが⁽²⁾、1977年の資料で見ると、総面積 108,333,000 ha 中、農地 6,291,000 ha (耕地 5,029,000 ha、草地 1,262,000 ha)、また1978年現在の土地利用は、登記総面積 108,177 平方キロ中、農地 6,281,688 ha (58.0%), [内訳、耕地 4,775,903 ha、緑地 1,242,644 ha (草地 625,668 ha、牧場 52,995 ha)] であった。西独側の資料によれば、1979年現在、

農地 6,280,000 ha (58.0%), [内訳, 耕地 4,767,000 ha (44.0%), 草地 1,239,000 ha (11.4%)], 他に森林 2,953,000 ha (27.3%), 湖沼・河川 222,000 ha (2.0%) であった⁽³⁾。なお近年の資料を, 序で紹介しておけば, 旧東独の土地利用は, 総面積 356,945 平方キロ (1990.3) のうち, 農地 [耕地 1,239 万 ha (34.7%) うち樹園地 44 万 ha, 牧草地 567 万 ha (15.9%)], 森林 1,038 万 ha (29.1%) その他 651 万 ha (1989 年) となっていた⁽⁴⁾。

そこで, 「杜の都」ベルリンの由来を一応述べておけば, 王城の地であったベルリンには, シャルロッテンブルク Charlottenburg 宮殿, フリッツ宮殿 Fritz-Schloss, ベレブエ城 Schloss Bellevue などの宮殿・緑地空間があった* ほか, ティーア・ガルテン Tiergarten (当初は 225 ha) などの選帝侯の居館や狩猟地があったため, 由来, 広大な森林や緑地が多かった。

* シャルロッテンブルク Charlottenburg 宮殿は, 1701 年プロンシャ王フリードリッヒ三世と宮殿の名称の謂れとなったブラウンシュヴァイヒ (Hannover) 家の王女, シャルロッテ Sophie Charlotte との挙式のため, 1695—1706 年に造営された⁽⁵⁾。フリッツ宮殿は, 第二次大戦中, 空爆により破壊され, 現在, Poststadion として利用されている⁽⁶⁾。またベレブエ城は, 1785 年フリードリッヒ大王の末弟, プリンツ・アウグスト・フェルディナンドが建設したと伝えられている⁽⁷⁾。

また「記念碑ラウフ」Denkmäler Rauch と謳われた ラウフ Cristian Daniel Rauch (1777—1857) や, 「風致造園家」の令名を得たレンネ Peter Joseph Lenné (1789—1866), ブュクラー・モスカウ Hermann Fürst v. Pükler-Moskau (1785—1871) などの優れた造園家が, 歴代の王の命によって, 力を尽くしたことも, 忘れらるべきではない。レンネが, 1816 年以降, ベルリン市や周辺のポツダムなどで, 公園づくりの仕事を精力的に行ったことも, 既に (第 2 章第 3 節) 簡単に述べたが, ここでやや詳しく触れておくと, サンスーシー宮殿付属庭園の造成者として知られる彼は, ベ

ルリンでも大規模な庭園・公園や風致地区の造成を次々と行って、この都市の「緑の顔」に光彩を添えた。彼は、むかし選帝侯の狩猟地であったティーア・ガルテンを1819年造成し⁽⁸⁾、ヨーロッパ有数の美しい公園として今日知られるまでに仕立て上げた。彼は、晩年にも、クロイツベルク公園(1860)、ヴィルヘルムプラッツ Wilhelmplatz (1862) や、モアビット新教ヨハネス修道院庭園(1864)などの造園工事を、次々と手掛けている。第2章で述べたように、彼はベルリンがドイツ帝国の首都となるのを見ずして、1866年に死んでいるが、帝国建設の年1871年には、首都ベルリンの公園・緑地づくりの仕事の基礎は、あらかた終っていた⁽⁹⁾。(レンネに関しては、ティーア・ガルテンの項も参照されたい。)

* このような沿革と先人の努力があったため、ベルリンには今日でも森林・緑地や公園が多い。標題の時代と離れるが、その概況に関して、参考までに、最近の数字を示しておこう。1985年の統計で見ると、旧西ベルリン市では、総面積48,000 ha のうち、住居地・空き地が 20,100 ha (41.9%) で、森林、緑地などのレクリエーション用地、農地、水路などの都市空間(森林 7,700 ha 16.0%, リクリエーション用地 4,700 ha 9.8%, 農地 2,400 ha 5.0%, 水路 3,200 ha 6.7%) は、計 18,000 ha、実に全体の37.5%を占めている⁽¹⁰⁾。また宇宙衛星写真(ラントサット・T・M)によれば、1984年の土地利用は、闊葉樹林、針葉樹、水路、草原などが全市の約三分の一を占め、他に市街地にある ≧80—100% 封印地 Bodenversiegelung ≪ が、9.6%と算定されている⁽¹¹⁾。一方、旧東ベルリン市(1978年、403平方キロ、人口密度平方キロ当たり2,801人)は、第二次大戦で既成市街地の三分の一を瓦礫と化したのが、西ベルリン市と類似の方針をとり、緑地の保全に努めて来た。「総ての市民に光と空気と太陽を」「歩行者と車両の分離」は、戦後1960年代に至るまで、旧東ベルリン市が採り続けた「住工分離」による市街地分散政策のスローガンであった⁽¹²⁾。統計の枠組みが違っているので、西ベルリン市と比較し難いが、1978年の資料で見ると、旧東ベルリン市は、総面積 403 平方キロ中、農地 12,835 ha (0.32%, 内訳、耕地 8,570 ha、草地 421 ha) を有していた⁽¹³⁾。

そこで、「杜の都」ベルリンの象徴とも言うべきデア・グルネヴァルト

とティーア・ガルテンについて、以下に紙幅の許す限り述べておこう。これらの文化遺産は、標題の時期1871—1914年のベルリン市民の健康生活と、大きく関わったであろうことが、当然推定されるからである。

デア・グルネヴァルト

ベルリン緑地の代表ともいうべきデア・グルネヴァルトは、恐らく、太古からこの地にあったであろう。こんにち、オリンピック・スタジアム付近から南9 km, ヴァンゼー Wansee に至る長大な森林(40q km)で、西はハーヴェル川に臨み、その東と南には、グルネヴァルトゼー Grunewaldsee, クルメ・ランケ Krumme Lanke, シュラハテンゼー Schlachtensee などの美しい湖沼の散在する景観の地で、その南部を占めるベルリナー・フォレスト一帯は、今日でも、この都市の最も美しい風景であろうか⁽¹⁴⁾。人々がこの森を何時ごろから狩猟地として用いて来たかは明らかでないが、記録を辿ると、825年ごろ、シュパンダウ Spandau に砦が初めて築かれている⁽¹⁵⁾。その後、1470年に、この地に居館が定められたことにより、シュパンダウのハーヴェル川渡河点は、ベルリンへの戦略的な橋頭堡となった⁽¹⁶⁾。そして、1520年と1557年に、より堅固な城塞に改造された⁽¹⁷⁾。1542年3月、この地を王家の狩猟地として定めたことを示す礎石が、こんにち現存している⁽¹⁸⁾ので、ホーエンツォーレルン家のこの地への進出と統営は、ヨアヒム一世ネスター Joachim I. Nester (治世1499—1535)からヨアヒム二世ヘクター Joachim H. Heker (治世1535—1571)にかけての時代、すなわち1532年(Kürtin 砦築城)から1560年(Spandau 内城の築城)までの間に、行われたと言ってよからう⁽¹⁹⁾。その後、1709年に、フリードリヒ一世もこの地に居館を定めている⁽²⁰⁾。

ティーア・ガルテン(168 ha, 内 13.37 qkm が旧西ベルリン市)は、旧東ベルリン市内にあったベルリン最古の市立公園フリードリヒスハイン Volkspark Friedrichshain (1848年開園, 53 ha)⁽²¹⁾とともに、現在で

も、この市の貴重な空間緑地であり、「三月以前」からのベルリン市民のリクレーション・ゾーンであった。この公園の幾つかの庭園が、1816年以降と1833—38年に、レンネ* によって造成されたことは、こんにち有名であるが、その沿革史を略述しておく、以下のとおりである。

この公園の沿革は極めて古く、16世紀に遡る。当時ブランデンブルク選帝侯たちは、シュプレー湿地の水郷付近や森林一帯で狩猟するのが常であった。18世紀中葉には、既に大ティアー・ガルテンはベルリン人の保養緑地として解放されていたという⁽²²⁾。すなわち、フリードリヒ一世は、1709年、ベルリン Berlin, ケルン Cölln, フリートリヒスヴェルダー Friedrichswerder, ドロテーンシュタット Dorotheenstadt, フリートリヒシュタット Friedrichstadt の五町を合して、この地に居館を定めたが⁽²³⁾、この公園は、もともと選帝侯の狩猟地で、選帝侯フリードリヒ三世治下の1700年頃から、狩猟用の森林であって、「ゾルダーテン・ケーニッヒ」フリードリヒ・ヴィルヘルム一世**治下の1717年までは、選帝侯の造った間垣がそれを取り囲んでいたとの記録がある⁽²⁴⁾。その後、その一部を、フリードリヒ大王（治世1740—1786）がフランスをモデルとし、またその王位継承者フリードリヒ・ヴィルヘルム二世（治世1786—1797）が、イギリスを例として、ともに庭園風に改作、王家のために使用していた⁽²⁵⁾。

* 1789年9月、数世代続いた造園師の子としてボンに生まれたレンネは、1803年以降、ウィーン・ベニス・ローマなどを修業旅行をして、造園技術を磨いたのち、ドイツに帰国、1816年ベルリン・ツェーレンドルフのシュロス・バルクの造園に手を染め、その仕事振りを買われて⁽²⁶⁾、1818年ポツダムの王立庭園監督官 Gartenintendantur に任命され⁽²⁷⁾、ティアー・ガルテンを田舎風の国民公園に改造するためのアイディアを盛り込んだ計画案を作成⁽²⁸⁾、10年後の1828年には、「ライン人」の彼が、プロシャ王家の庭園に関する一切の責任を任されている⁽²⁹⁾。レンネが、ラウフの後をうけて、プロシャ王立庭園総支配人 Generaldirektor der Königlichen Gärten に任ぜられたのは、フリードリヒ・ヴィルヘルム三世時代（治世1776—1840）の1824年で、その祖父アウグスト・ヴィルヘルムの遺

命によると言われているが⁽³⁰⁾、折り宛も、ナポレオンの影響を受けたプロシヤ建築の全盛時代であった⁽³¹⁾。レンネが、公園の造成に続々取り組んだのは1816年以降で、同年、彼は、ポツダムのノイエル・ガルテンとサンスーシー庭園を、また1818年、同ポツダムのルスト・ガルテンを造成したのを手始めに、彼の死の数年前に至るまで、ポツダムの仕事(1859年、ノイエス・オランジェリー・ハウス、1860年、ノルディッシャー、ガルテン・サンスーシーほか)に関わっている⁽³²⁾。

**「ゾルダーテン・ケーニッヒ」フリードリヒ・ヴィルヘルム一世(治世1713—1740)は、快活そのものの王で、シャルロッテンブルクに劇場を作らせたりしたが、治世末期になると、シャルロッテンブルク城と庭園に手を加え、支配者の威厳を保とうとした。一つには、プロイセンの軍事的・政治的な劣位を克服するためであり、また王家の生活スタイルを、フランス流に改めようとしたからと言われている。そして次の国王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世(治世1797—1840)も、父の意志を引き継いだ⁽³³⁾。

軍事地図師カール・フォン・デッカー Carl von Decker が制作した1820年のベルリン近郊図には、当時のベルリンの状況を、「東西に開け、一面に緑地と森で覆われた原始林地帯」と記述、シュパンダウエル・フォルスト Spandauer Forst (現在のベルリナー・フォレスト)、ディー・ユンクフェルン・ハイデ Die Jungfern Heide (後のシャルロッテンブルク一帯)、ディー・ウール・ハイデ Die Wuhl Heide (後のノイケルン一帯)などの広大な緑地を描いている⁽³⁴⁾。その後王庭には、1792年以来、絶えて久しく整備の手が加えられなかった為、生彩を欠いており、その整備が懸案となった。かくて、フリードリヒ・ヴィルヘルム三世時代の1819年、当時30歳になったばかりのレンネが、この公園の北隅に位置するシュロス・パーク・シャルロッテンブルクの造成を、始めて手掛けることになる。

さて、レンネが1816年以降ティーア・ガルテンの造成に再び力を尽くしたのは、1833—39年であるが、1832年、レンネは、並木の大遊歩路や既存の諸施設を生かしたままで、四阿や木立ちや林苑・緑地などをもった田舎

風の公園を構想、このレンネの改造プランに基づいて、1833—38年に、この公園は全面的に改修されている⁽³⁵⁾。

② 都市計画と住宅政策

ところで、ベルリンの近代的な都市計画がいつの時点を嚆矢とするかは、何を「近代的」とし、何を本来の「都市計画」と考えるかによって、異論が生じ得よう。ベルリンで本格的な住宅政策の展開がみられた1890年から1910年にかけての、いわゆる「石造りベルリン時代」を、その始点と見るか、それ以前の時期を起源とみるかは、論議の分れるところであろう。参考までに、都市近代化の指標になるような出来事を挙げておけば、在来の舗装の取り替えが問題になって、街路舗装が始められたのが1823年、ガス工場が出来て、この町に始めて市営のガス灯設備が完成したのが1847年⁽³⁶⁾、上水道事業の着手が1856年、(1878—93年公営水道事業の開業と拡充)、排水施設や運河が整備・開通したのが1878年であって、こうした都市化に伴う基礎施設の整備が完成するまでには、優に20年以上を要しており、電力の供給(1884—1915年)には、その後の歳月を待たねばならなかった⁽³⁷⁾。

ともあれ、学問的な都市建設ないしは都市計画の論議は、1860年代には、未だ行われていなかった。当時は、実務的ないしは美学的な観点から都市計画が行われたに過ぎず、1876年カールスルエ大学教授バウマイスター Reinhard Baumeister が、彼の研究『技術的・建築政策的・経済的關係における都市の拡大』を公刊してから、漸く科学的な都市計画論議が開始めたと、最近の研究の中で、ルボヴィツキ Lubowitzki は述べている⁽³⁸⁾。

それゆえ、ベルリン市の近代的都市計画を論議する場合、1862—1919年の間適用され続けていた建設計画 Bebauungsplan (1862年)を、差し当た

っての論議の糸口とするのが至当と思われる。この計画は、四年前の1858年、プロシヤ政府が、ベルリン近郊の総合的な建設計画のイニシアティブをとったことに始まるが、その辺の事情につき、つぎに述べよう。

こんにち、その主要協力者、ジームス・ホブレヒトの名を冠して「ホブレヒト・プラン」と呼ばれるこの計画（正式には、Bebauungsplan für die Umgebungen Berlins）は、1861—62年より1919年に至るまで、この都市の発展に影響し続けた⁽³⁹⁾。この計画は、ベルリン市の将来の建築計画を作成することを狙いとするものであるが、40年代に始まった工業化に起因するこの都市への人口集中の結果、1860年代が近づくにつれて、住民数は激増し（「ベルリン地域医療史1871—1914」政経論叢 58 巻 3・4 号、第 3 表参照）、城壁内の居住空間への需要を充足することが出来なくなったので、多年の抵抗を続けてきたベルリン市議会も、遂にベルリン市域の統合に反対し続けることが出来なくなり、都市ベルリンの空間的な外延を認めざるを得なくなった。かくて、議員連は、賃貸住宅の家主としての利害よりも、自分たちの独占的な支配権* を存続して行くことの方を、選ばざるを得なくなり、1860年始めには、多年の抵抗を緩めることとなった。

* ベルリンでは、従来（1850年代）は、「家主議会」Hausbesitzerparlament といわれていたほど、市会議員の家主としての特権が認められていた。具体的に言えば、議会の「むき出しの利益の主張」の結果、1853年 5 月 24 日の市条例の規定により、市会議員の少なくとも半数は、町の中に家屋を所有しなければならないものとされており、また1850年の三級選挙法の適用も受けていたので、事実、市会議員の約三分の二が、家屋所有者ないしは地主であったという。そして、50数年後の1907年当時でさえも、114 名の市会議員のうち、その 8 割の 92 議員が家主だったほどである⁽⁴⁰⁾。

ともあれ、プロシヤ政府は、市域統合を可能にする法源として1853年の市条例第 2 条の規定を援用、王の勅令を用いて、市議会などの市機関の抵

抗に抗しつつ、市域統合を断行したのであった。かくて、1848年以來の懸案の市域の統合は、1860年1月28日付けの勅令で公布された。モアビット、ヴェディング、シェーネベルクのゲマルクンゲン Gemarkungen 北部、テムペルホフ Tempelhof などが、1861年1月1日付けで統合され、1862年の建設計画と相俟って、城壁外にベルリンの建築物を外延することが、事実上可能となった*⁽⁴¹⁾。

* この町の庶民層の間には、三月革命前の1845年頃から、市民層に対する反対運動の根強い機運があった。ヘルツィヒのいうように、それはパラドキシカルな動きであったが、国の近代化に抗するものでなく、ローカルな次元での街路上での喫煙の禁止令(1845)とか、通行税の小煩く悪意にみちた規定に向けられていた。庶民層は、市民層が利害関心をもつ国の近代化に対する戦いの単なる勢子として利用されることに満足せず、また目標も、市民層とは同じではなかった。とりわけ、町の森での放牧禁止に対する数多くの抵抗運動は、その顕著な例であった⁽⁴²⁾。①1857年のプロイセン参謀本部の地図⁽⁴³⁾、②1867—74年のプロイセン参謀本部の地図⁽⁴⁴⁾、③1896年のモニュメンタル・プラン (Monumental Plan)⁽⁴⁵⁾、④1905年の大ベルリン・パルス地図 (Pharus-Plan)⁽⁴⁶⁾ の四つの地図を比較してみると、①と②の間、つまり1860年代に、ベルリンの市域の外延は、かなり行われているが、それは、一つには、首都防衛という軍事的な観点を第一義として、行われたものと言えよう⁽⁴⁷⁾。

この様にして、プロシヤ政府は、1860年代に、ベルリンの都市計画を外延し、市域を拡大する。第6表⁽⁴⁸⁾は、1830—1900年のベルリンとその行政区画(58巻第3・4号、第1図参照)における住民数の増加振りを示すが、ベルリン中央部と比較して、その周辺部(モアビット、リクスドルフ)などの人口増が、1860年代後半以降、とりわけ急激であったことが窺われる。1866—72年は、元プロイセン法相で1853年以來、プロイセン下院議員(国民自由党)であったグナイスト Rudolf Gneist (1816—1895)や、当時(1865—67)オスナブツク市長だったミクエル (Johanes Miquel 1828—1901、1867—76国民自由党所属下院議員)などのアルト・リペラー

ベルリン地域医療史 1871—1914 (Ⅲ)

第6表 ベルリン市における住民数の変遷 (1801—1900年)

年	Berlin		Weiterer Polizeibezirk		Moabit		Rixdorf	
	計	増加率	実数	増加率	実数	増加率	実数	増加率
1801	173, 440	100	9, 483	100	127	100	714	100
1822	206, 309	119	16, 105	170	544?	—	1, 318	185
1825	219, 968	127	19, 015	201	426	335	1, 856	260
1828	236, 494	136	20, 975	221	562?	—	1, 935	271
1831	248, 196	143	22, 116	233	866?	—	2, 074	290
1834	264, 590	153	22, 321	235	708	558	2, 081	291
1837	283, 140	163	25, 236	266	811	639	2, 329	326
1840	322, 626	186	27, 420	289	986	776	2, 430	340
1843	349, 110	201	29, 006	306	1, 204	948	2, 598	363
1846	397, 001	229	33, 016	348	1, 791	1, 410	2, 651	371
1849	412, 154	237	36, 628	386	2, 196	1, 729	2, 850	399
1852	421, 797	243	42, 629	450	3, 921	3, 087	3, 421	479
1855	434, 367	250	49, 385	521	5, 446	4, 288	3, 650	511
1858	458, 637	264	60, 846	642	6, 534	5, 145	4, 091	573
1861	547, 571	316	35, 096	370	8, 199	6, 456	4, 468	626
1864	633, 279	365	39, 494	416	8, 989	7, 078	5, 459	765
1867	702, 437	405	44, 489	469	12, 250	9, 646	6, 262	877
1871	825, 937	476	57, 838	610	14, 818	11, 668	8, 125	1, 138
1875	966, 858	557	103, 838	1, 095	19, 361	15, 245	15, 323	2, 146
1880	1, 122, 330	647	125, 814	1, 327	29, 639	23, 380	18, 729	2, 623
1885	1, 315, 287	758	163, 536	1, 623	48, 219	37, 968	22, 775	3, 190
1890	1, 578, 794	910	268, 520	2, 832	93, 463	73, 591	35, 702	5, 000
1895	1, 677, 304	967	435, 062	5, 487	128, 288	100, 672	59, 945	8, 396
1900	1, 888, 848	1, 089	639, 882	6, 748	159, 791	125, 819	90, 422	12, 664

レ派の人々が、ベルリン市議会 Stadtverordnete やベルリン大学の国法学者たちの協力を得て、都市自治理念の拡張に努めていた時期であったことも幸いした⁽⁴⁹⁾。第7表⁽⁵⁰⁾は、ベルリン周辺地区自治体 (Landgemeinden) の人口増 (1801—1910) を示す。旧市内の東の外壁の直ぐ外にあったシュトララウ Stralau 地区と、それぞれ大ベルリンの西部・北部・南部・東部のはずれ、ブフ Buch 地区、シュターケン Staaken 地区、マリエンフェ

第7表 ベルリン周辺地区自治体の人口増 (1801—1910年)

年	1801	1840	1858	1871	1875	1880	1885	1890	1895	1900	1905	1910
Stralau	75	128	165	474	498	675	737	1,262	1,750	1,684	3,539	4,127
Buch	228	234	267	260	270	253	260	271	298	395	1,197	5,286
Staaken	230*	341	429	712	865	923	1,033	1,533	1,670	2,061	2,272	2,350
Marienfeld	148	255	496	599	846	911	998	1,334	1,633	1,963	2,901	3,684
Mahlsdorf	257	388	569	727	768	758	716	788	850	1,054	2,107	3,891

* 1880年

ルド Marienfeld 地区, マールズドルフ Mahlsdorf 地区の人口変遷を, 対比して見よう。

かくて, ベルリン市域は 3,511 ha から 5,923 ha に拡大され, 1920年10月の大ベルリン法 (Gross-Berlin-Gesetz, 正式には Gesetz über die Bildung einer neuen Stadtgemeinde Berlins) が発効してベルリンが四百万都市になるに至る⁽⁶¹⁾まで, 以後60年間, さしたる市域統合は, 論議の俎上に載らなかった⁽⁶²⁾。

もっとも, このようにして推進されたベルリンの外延も, 決して庶民に良質の住居を提供するものではなかったようである。第8表⁽⁶³⁾は, 1831—61年におけるベルリンの住宅事情を示す。その貧困ぶりは, 後になるに従って, 顕著になっているが, 30年代以降, 裏長屋の数の増加率が, 表道路に面した家屋のそれより, 急ピッチであることが分かつろう。試みに, 1831

第8表 ベルリンの住宅 (1831—61年)

年	Vorderhäuser	Hinterhäuser
1831	7,330	5,180
1840	7,994	7,317
1852	9,349	9,378
1858	9,661	10,302?
1861	11,285	10,191?

年の家屋数を、いずれも 100 とした指数で計算してみると、1861年、表道路に面した家屋 *Vorderhaus* が153.9であるのに対して、裏長屋 *Hinterhaus* のそれは196.7である。そして、1875年頃には、ベルリン住民の34%は、裏長屋に住むに至っている⁽⁶⁴⁾。

また、ランゲの記述によれば、1861年当時、市民の期待に反して、住宅事情は劣悪で、とりわけ労働者の居住環境は、住民43,326の10分の1が、地下室 *Kellerwohnung* に居住する有様で、その数は漸増しており、105,811戸の住居中、約半数の51,909が、暖房付きの部屋に住んでいた過ぎず（住民の4.3%）、27,600人は七人部屋に、18,400人は八人部屋に、また10,700人は九人部屋に、雑居的に暮らしていたという。そして、1870年代の建築ブームも、この様な状況を一掃するに至らず、ベルリン市民の3分の2（約60万人）は、依然、暖房付きの部屋が一間もない程度の小住宅に住み、その内、16万2,000人は、殆ど居間 *Stube* と台所だけの過密小住宅の住人であり、七人部屋が平均であった⁽⁶⁵⁾。そればかりか、1900—1905になると、ベルリン市域の住宅事情は、住民の大多数、労働者と無産階級にとって、破滅的な状況を意味するようになった。63.4平方キロの市域を有するベルリン市は、世界有数の過密都市となり、周辺の労働者地区（リクスドルフ、リヒテンベルク、ルメルスブルク、カールスホルスト、シャルロッテンブルク場末町）も、深刻な状況で、殆ど5階建て住宅の22.6%に、100—300人が住んでおり、また地下室に26,000人が居住していたという⁽⁶⁶⁾。1862年1月、ヴィルヘルム一世が即位、次いでビスマルクを首相に登用する（9月）と、軍制改革熱の高まりのもとに、民生は圧迫されていく。なお、1862年までのベルリン市における賃貸住宅の実情に関しては、ガイスト／キュールバースによる浩瀚な研究があるが、400万のベルリン市民向けの借家用小住宅 *Mietkasern* の建設計画（1862.9.1）に対しても、警察が種々の規制を加えた様である⁽⁶⁷⁾。1870年に書かれた「ドイ

ツの将来」と題するオーストリアのカリカチュアは、尖頂のついたプロイセンの軍帽 Pickelhaube を懸命に支える庶民の足を描き、ドイツの将来が明るくないことを風刺していた⁽⁵⁸⁾が、まさに、このカリカチュアは、その後白昼夢のように現実化したと言えよう。筆者がベルリン市民の生活窮乏を予知していた感があるのは、興味深い。

この時代に、住宅建設投資は、借家用の小住宅 Mietkasern と富裕市民層が居住するための広く快適な住居（賃貸）のみの建設を目当てとして、専ら行われたため、第一次大戦勃発直前には、3—4室の中規模住宅の建設は、顕著に激減した。そればかりか、この時期には、経済発展がかなりの豊かさを市民の一部に提供したので、1910年頃には、5部屋以上の大きな住居への需要が生れたものの、ベルリン圏における住宅市場は事実上崩壊し、住宅建設は殆どゼロとなった。1910年の住宅事情については、第3章(2)の③の第5表を参照されたい⁽⁵⁹⁾。

労働者用賃貸住宅 Arbeitermiethaus は、1880—1910年の間に、市内にかなり多数建てられたが、表道路に面した家屋は、専ら小市民的な商人ないしは専門労働者で占められていた⁽⁶⁰⁾。そして第一次大戦直前になると、1900年以降施行の建築基準に準拠して建てられたベルリン工業地区内の集合住宅地は、(市の建築債で建てられたものを除けば)、昔の労働者住宅の名残りを殆ど止めない迄になっていたが、公共の住宅施設は、極度に不足していた⁽⁶¹⁾。エルベは、ベルリン市の統計年報(1878年版と1920年版)から、単位面積当たりの住民数を見ると、1870年—1900年の間に、全ベルリンの平均指数で、57.9から77に上昇しているが、その後は1910年の76から1917年の63へと減少していたことを根拠としつつ、住宅事情の劣化現象が、第一次大戦前まで進行していたと述べている⁽⁶²⁾。また、1901—1920年の住宅事情の貧困振りについては、こんにち多くの研究によって明らかにされている⁽⁶³⁾。

この章を終るに当たって、ベルリン労働者の当時の状態について触れておけば、1898年当時でも、東独、ブランデンブルグなどからの流入労働者が多く、12.8%は少年労働者で（プロイセン王国の平均は5.2%）、1895年時点で三分の一を占める婦人労働者（8万人）が、手工業、商業、既製服店、家事労働などに従事していた⁽⁶⁴⁾。

* 全ドイツの婦人労働者は、飲食店（66.9%）、縫製業（50.9%）、繊維産業（50.9%）、商業（31.2%）、農林業（21.2%）などに従事していたとの記録がある⁽⁶⁵⁾。

《注》

- (1) Diercke Weltstatistik 82/83, Staaten, Wirtschaft Bevölkerung, Politik, München: dtv/Westermann Verlag, 1982, S. 15.
- (2) Lexikon der Sozialpolitik, Berlin: Akademie-Verlag, 1987, S. 251.
- (3) Statistisch Jahrbuch, Berlin: Staats-Verlag der Deutschen Demokratischen Republik, 1979 S. 1, S. 24, S. 155, 3* u. 63*, Diercke, op. cit., S. 37.
- (4) Der Fischer Weltalmanach 1992, S. 308, 世界各国要覧 1992, Vol. 15, 二宮書店, 138ページ。
- (5) Preussen Ploetz S. 46. Gerd Heinrich (Hrsg.), Handbuch der Historischen Stätten Deutschlands, Berlin u. Brandenburg. S. 26 u. S. 495, Stuttgart: Alfred Kröner Verlag, 2ter Aufl. 1973, Peter Neumann, Wo War Was in Berlin, Ein ungewöhnlicher Stadtführer durch eine aussergewöhnlicher Stadt, Berlin: Dietz Verlag, 1990, S. 33. Baedeker Allianz Reiseführer, Stuttgart: Verlag Karl Baedeker, S. 113.
- (6) Karl Baedeker, Berlin, Handbook for Travellers, Freiburg: Karl Baedeker, 1965, 7th Edition, S. 103.
- (7) Peter Neumann, op. cit., S. 26. Karl Baedeker, Baedekers Berlin, Freiburg: Verlag Karl Baedeker 1987, S. 49. Baedeker Allianz Reiseführer, Stuttgart: Verlag Karl Baedeker, S. 100.
- (8) *Chronik, Berlins*, S. 118. u. S. 171.
- (9) レンネ Peter Joseph Lenné の事績に関しては、最近、クラウス Klaus von Krosigk のかなり詳細な研究 Peter Joseph Lenné in Ribbe/Schäche

- (Hrsg.), op. cit., SS. 171-194. が出されている。
- (10) Statistisches Bundesamt (Hrsg.), Statistisches Jahrbuch 1989 für die Bundesrepublik Deutschland, Stuttgart: Metzler Poescher Verlag, S. 14. u. S. 141.
 - (11) Wolfgang Scharfe (Hrsg.), Berlin und seine Umgebung im Kartenbild, Wissenschaft und Stadt Publikation der Freien Universität Berlin aus Anlass der 750-Jahr-Feier Berlins, Band 2, Berlin: Colloquium Verlag, 1987, SS. 68-71.
 - (12) Jochen Boberg, Tilman Fichter und Eckhart Gillen, Die Metropole Industriekultur in Berlin im 20. Jahrhundert, München: Verlag C. H. Beck, 1986, S. 330 f., Senator für Bau- und Wohnungswesen Berlin Abteilung Vermessung (Hrsg.), Topographischer Atlas Berlin, Berlin: Dietrich Reimer Verlag, 1987, (以下, Topo と略称する) SS. 22-25.
 - (13) Staatlichen Zentralverwaltung für Statistik (Hrsg.), Statistisches Jahrbuch der Deutschen Demokratischen Republik, Berlin: Staatsverlag der Deutschen Demokratischen Republik, 1979, S. 1 u. S. 155, Statistical Pocket Book of the German Democratic Republic, Berlin: Staatsverlag der DDR, 1978, S. 11.
 - (14) Polyglott-Reiseführer Berlin, München: Polyglott-Verlag, 11. Aufl. 1980/81, S. 38, dito, 21. Aufl. 1991/92, S. 37 f.
 - (15) *Chronik Berlins*. S. 15.
 - (16) Topo., SS. 67-68.
 - (17) *Chronik Berlins*, SS. 62-67.
 - (18) dito, S. 65.
 - (19) Manfred Schlenke, Preussen-Ploetz, Preussische Geschichte zum Nachschlagen, Freiburg/Würzburg: Verlag Ploetz, 1987, S. 20.
 - (20) *Chronik Berlins*, S. 106.
 - (21) Polyglott-Reiseführer Deutsche Demokratische Republik, München: Polyglott-Verlag, 1976. S. 21.
 - (22) Topo., S. 159.
 - (23) Bodo Harenberg (Red.), Chronik der Deutschen, Chronik Verlag, Dortmund: 1983, S. 381.
 - (24) Gerd Heinrich (Hrsg.), op. cit., S. 9, Marianne Mehling (Hrsg.), Knauers Kulturführer in Farbe Berlin, München: Droemer Knauer, 1987, SS. 152-153.

- (25) Baedkers Berlin, Freiburg : Verlag Karl Baedeker, 1987. S. 46.
- (26) Ribbe/Schäche (Hrsg.), op. cit., S. 192.
- (27) *Chronik Berlins*, S. 176.
- (28) Topo., S. 159.
- (29) *Chronik Berlins*, S. 176.
- (30) dito, S. 193.
- (31) Walter Bussmann, Zwischen Preussen und Deutschland Friedrich Wilhelm IV, Berlin : Siedler Verlag, 1990, S. 97 f. u. SS. 315-8.
- (32) Ribbe/Schäche, op. cit. S. 194.
- (33) Hans Zielinski, in Joachim Nawrocki (Hrsg.), Berlin Stadtansichten, Berlin : Stapp Verlag, 1986, S. 218 f.
- (34) *Chronik Berlins*, SS. 174-5.
- (35) Topo., S. 159.
- (36) *Chronik Berlins*, S. 201.
- (37) *EdM*, SS. 172-9.
- (38) J. Lubowitzki, Hobrechtplan in Wolfgang Ribbe (Hrsg.) Berlin Forschungen V, Berlin : Colloquium Verlag, 1990, SS. 54-55.
- (39) 「ホブレヒト・プラン」についての詳細は, dito., SS. 11-130 を参照されたい。
- (40) *EdM*, S. 182.
- (41) dito., SS. 182-3.
- (42) Arno Herzig, Unterschichten-protest in Deutschland 1790-1870. Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1988, S. 45.
- (43) Wolfgang Scharfe (Hrsg.), Berlin und seine Umgebung im Kartenbild, Berlin : Wissenschaft und Stadt Colloquium Verlag Berlin, 1987. SS. 42-43.
- (44) dito, SS. 44-45.
- (45) *EdM*, Buchdecke.
- (46) Berlin und seine Umgebung im Kartenbild, SS. 48-49.
- (47) *EdM*, S. 208. u. S. 226 u. S. 255.
- (48) J. Lubowitzki, Hobrechtplan, Berlin Forschungen V, SS. 13-14.
- (49) Lothal Gall (Hrsg.), Stadt und Bürgertum im 19. Jahrhundert, München : Oldenbourg Verlag, 1990, S. 178 f.
- (50) Hans-Jürgen Rach, Die Dörfer in Berlin, Berlin : VEB Verlag für Bauwesen, 1988. S. 55, S. 198, S. 216, S. 313, u. S. 327.

- (51) *Chronik Berlins*, S. 340.
- (52) J. Lubowitzki, *Hobrechtplan, Berlin Forschungen V*, S. 17. 1873年3月ベルリンを訪れた岩倉具視は、当時の印象を次のように書いている。
「ソノ光景タル、荷蘭ノ諸都府トハ、面目ヲ異ニシ、亦英仏ノ諸都府ニモ異ナリ、此府中ノ屋造ハ、英仏兩都ノ如ク、石造ノ大屋ヲ聳カシ、金光爛然」、「亦価アル大厦多シ、伯林ニテ巧ミニ磚瓦ヲ焼ク」、「道路ノ甃石モ、大概ミナ至レリ、」（久米邦武編、『欧米回覧実記(三)』、岩波文庫、1979年、304ページ。
- (53) J. Lubowitzki, *Hobrechtplan, Berlin Forschungen V*, SS. 22-23.
- (54) dito, S. 23.
- (55) Annemarie Lange, *Berlin zur Zeit Bebels und Bismarcks Berlin*: Dietz Verlag, 1984, S. 122.
- (56) Annemarie Lange, *Das Wilhelm Berlin*: Dietz Verlag. 1980, S. 89. Johann Friedrich Geist/Klaus Kürvers, *Das Berliner Mietshaus 1740-1862*, 3 Bde. München: Prestel Verlag, 1980, S. 497.
- (57) dito, S. 496.
- (58) Hans Dollinger, *Preussen, Eine Kulturgeschichte in Bildern und Dokumenten*. München: Orbis Verlag, 1991, SS. 230-1.
- (59) Michael Erbe, *Sozial-und Alltagsgeschichte Berlins 1871-1945*, S. 6.
- (60) *EDM*, S. 213.
- (61) dito, SS. 224-230.
- (62) Erbe, *Berlin im Kaiserreich*, in Ribbe/Schäche, op. cit. S. 700.
- (63) 例えば, *EdM*, S. 260 f.
- (64) Gerhard A. Ritter/Klaus Tenfelde, *Arbeiter im Deutschen Kaiserreich, 1871 bis 1914*, Bonn: Verlag J.H.W. Dietz Nachf., 1992, S. 187.
- (65) dito, S. 212.

(4) 医療施設の充実と医療の向上

① 医療体制の充実

この町の病院建設が、17世紀以来の伝統（1685年選定侯立コレジウム・

メディクム、1719年ペスト・コレジウム、1726年フリードリヒ一世によるシャリテなどの設立)を有し、かなりの歴史をもっていることは、第3章(1)医学沿革史の項で既に述べたが、帝国建設以来、この市の医療機関や医療従事者数は徐々に増加し、医療体制も漸次充実して来ている。まずシャリテであるが、この病院は、1870—1933年に、ロベルト・コッホ Koch (1843—1910)、ウィルヒョウ、ブルグシ Brugsch Theodor (1878—1963)、ザウアーブルッフ Sauerbruch (1875—1951)などの錚々たる医師連がいたこともあって、世界的な令名を高め、全盛時代を迎えるようになる⁽¹⁾。そして、会社設立ブーム時代のピークであった1872年に、モアビット病院の建設工事は始められ、また翌年、最初のフリートリヒスハイム市立病院が、数年越しの工事の末、完成した⁽²⁾。そして、1886年より1913年にいたる期間、ベルリン市の病院数は、20から78 (3.9倍)* にと増えている。かくて、1900年には、ベルリンはドイツ最大の医師過密地となり、2,360名の医師を住まわせていた。この数字は、住民10万人あたり141人で、当時のドイツ平均52人の2.7倍に当たる⁽³⁾。参考までに、これらの数字を、全ドイツ規模のそれと対比してみると、第9表⁽⁴⁾でみるように、同じ1900年当時、医師数3,816、住民10万人あたり457人であった。本表が示すように、1876/7—1909年の約33年間に、ドイツ全土では、病院数で1.96倍、ベッド数で3.64倍、患者数で4.82倍、療養時間で4.37倍にと増え続けている。当然に、医療従事者の数も、上記と同一の期間に、医師数が2.23倍、歯科医師数が22.52倍、薬局数が1.39倍、薬剤師数が1.59倍 (第10表)⁽⁵⁾また助産婦数が1.14倍、看護婦数が6.44倍にと増していることは、第11表⁽⁶⁾で読み取れるだろう。尤も、数字の増加が、文字通りの医療体制の充実を意味したかどうかは、論議の余地があるが、ここでは一つのメドとして、まずは数字を掲げておこう。

ベルリン地域医療史 1871—1914 (Ⅲ)

第9表 病院数・ベッド数・患者数

年	病院数	計画ベッド数		入院加療患者数		
				実数		日数
	実数	住民1万人当り		1,000	住民1万人当り	1,000
Reichsgebiet						
1877	2,357	107,337	24.6	472.3	108.3	24,364
1878	2,509	112,926	25.6	537.6	121.8	25,258
1879	2,539	117,138	26.2	589.2	132.0	26,502
1880	2,544	119,172	26.4	611.0	135.5	27,039
1881	2,559	123,132	27.1	623.0	137.1	28,596
1882	2,521	127,692	27.9	631.8	138.2	29,609
1883	2,617	133,945	29.1	650.1	141.3	
1884	2,655	137,777	29.7	660.7	142.6	
1885	2,717	144,246	30.9	693.2	148.4	
1886	2,817	152,038	32.3	727.4	154.3	35,642
1887	2,780			721.8	151.5	
1888	2,936	165,555	34.4	751.4	156.0	
1889	2,992	172,609	35.4	815.9	167.5	
1890	3,053			865.7	175.9	
1891	3,121	188,518	37.9	951.9	191.3	45,851
1892	3,184	198,068	39.4	982.6	195.5	
1893	3,253			1,048.3	206.5	
1894	3,329	213,525	41.6	1,030.2	200.7	
1895	3,357	218,040	41.9	1,106.4	212.8	
1896	3,417	224,454	42.5	1,132.0	214.6	54,378
1897	3,524	232,970	43.5	1,184.2	221.1	
1898	3,631	242,398	44.6	1,239.5	227.8	
1899	3,714	246,726	44.7	1,341.7	242.8	
1900	3,816	255,957	45.7	1,374.6	245.3	
1901	4,060	274,526	48.3	1,452.1	255.3	69,755
1902	4,116	301,115	52.1	1,548.0	268.0	76,536
1903	4,213	306,396	52.3	1,681.5	286.8	81,441
1904	4,334	328,983	55.3	1,756.9	295.4	85,785
1905	4,478	343,659	57.0	1,851.0	306.9	89,799
1906	4,566	358,695	58.7	1,911.5	312.6	92,724
1907	4,644	373,354	60.2	2,024.8	326.5	97,567
1908	4,653	384,800	61.2	2,146.7	341.5	102,115
1909	4,617	390,315	61.3	2,277.9	357.5	106,592
1910	4,805	407,576	63.1	2,419.7	374.7	110,867
1911	4,871	426,934	65.3	2,608.7	399.1	116,276
1912	4,921	444,035	67.1	2,678.4	404.9	119,483
1913	4,930	462,203	69.0	2,808.7	419.3	123,627
1914	4,718	466,525	68.8	2,591.5	382.3	119,632

ベルリン地域医療史 1871—1914 (Ⅲ)

第10表 ドイツ帝国の医師・歯科医・薬局・薬剤師 (1876—1924年)

年	医 師		歯 科 医		薬 局 数		薬 剤 師	
	実 数	住民1万人 人当り	実 数	住民1万人 人当り	実 数	住民1万人 人当り	実 数	住民1万人 人当り
Reichsgebiet								
1876	13,728	3.2	498	0.1	4,465	1.0	6,261	1.5
1887	15,824	3.4	548	0.1	4,694	1.0	6,353	1.3
1891	19,630	3.9	806	0.2	4,892	1.0	—	—
1896	23,910	4.5	1,154	0.2	5,201	1.0	—	—
1899	26,689	4.8	5,798	1.0	5,384	1.0	—	—
1900	27,374	4.9	1,583	0.3	5,437	1.0	—	—
1905	31,041	5.1	2,192	0.4	5,703	0.9	—	—
1909	30,558	4.8	11,213	1.8	6,189	1.0	9,934	1.6
1924	40,139	6.4	7,494	1.2	—	—	—	—

第11表 ドイツ帝国の助産婦・看護婦・看護人 (1876—1927年)

年	助 産 婦			看 護 人		
	実 数	住民1万人 人当り	1人当りの 出産児数	総 数		看護婦
				実 数	住民1万人 人当り	実 数
1876	33,134	7.7	55.4	—	—	8,681
1887	36,046	7.6	50.6	14,585	3.1	12,971
1898	37,025	6.8	54.8	29,577	5.5	26,427
1909	37,736	6.9	54.8	68,818	10.8	55,937
1927	29,348	4.6	40.8	88,872	14.1	74,839

* 因みに、1979年1月現在、旧西ベルリンの開業医数は791、専門医数は、1491⁽⁷⁾、また、1986年未現在、西独全体のそれは、医師数165,015人（うち女医41,857人）、医師一名当たり住民379人の割合であった⁽⁸⁾。最新の資料によれば、この数字は、1987年12月末現在、医師数171,487（うち女医44,999人）で、1987年医師一名当たりにつき住民371人、1988年同357人にと、変遷していた。1987年現在、病院数3,071（673,687床）という数字も参考になろうか⁽⁹⁾。なお、統一前の旧東ベルリン市の数字は、掴みにくい、旧東独全土に関して、つぎの数字がある。医師数1987年—40,516、1988年—41,639、医師一名あたりの住民数1987年—411人、

1988年—417人。1989年以降は、2,000人の医師が西独に流出したので、1989/90年東独の医療体制は深刻な危機に陥ったが、1987年—病院数543, ベッド数165,950床(住民10万人につき101床), 1988年—病院数541, ベッド数167,612床(住民10万人につき100床)であった⁽¹⁰⁾。参考までに、同じころの日本の数字を並べてみると、1982年届出医師総数167,952, 1984年同181,101, 1986年末現在, 同191,346, 1988年末現在, 同201,658であり、人口10万人あたりの医師数は、1984年150.6人, 1986年末現在, 157.3人, 1988年末現在, 164.2であった。また病院数は、1986年—9,699, 1987年—9,841, 1988年—10,034, 1990年—10,081, 人口10万人あたりの病院数は、1985年—7.9, 1986年—8.2, 1987年—8.0, 1988年と1989年は、ともに8.2, そして人口10万人当たりのベッド総数は、1986年1,492.7, 1987年1,521.8, 1988年1,556.5, 1989年1,573.1であった⁽¹¹⁾。

それでは、当時の市民が悩まされた疾病は何だったか。ウィルヒョウは、1879年、ベルリン市民の過去15年間にみる死因別平均数は、多い順から、①肺結核 Lungenschwindsucht 2,043, 呼吸不全 Krämpfe 1,140, ③肺癆 Abzehrrung 1,023, ④コレラ Brechdurchfall 708, ⑤新生児虚弱体質 Lebensschwäche d. Neugeborenen 675, ⑥下痢 Durchfall 594, ⑦脳卒中 Gehirnschlag 553, ⑧肺麻痺 Lungenlähmung 520, ⑨咽喉炎 Bräune, Croup 502 であると、書いている。彼は、それらが主として伝染病の蔓延に起因することを、1854—61年(21.15%)と1862—71年(29.85%)のデータから立証した。彼によれば、当時、近年になるにつれて漸次増え続けて来た人の往来や人的交流の増加が、その猖獗の主因であった。だが、彼は、市民の健康状態を規定する生活環境の劣悪さ(住宅事情の貧困さと、町の不衛生そのものの環境)こそが、その掘って来る根因であることを、慧眼にも指摘している。彼の分析によれば、1,000人の居住者のうち、死病に罹ったものは、1864年当時、地下室 Keller 居住者で27.1人、四階以上の居住者で30.1人、1867年当時は、それぞれ24.5人と26.7人もあった。1864年で33人に一人、また1867年には35人に一人が、死病に冒されたのであった⁽¹²⁾。

第12表 死因別にみた疾病名と患者数 (1892—1914年)

年	疾 病 名	患 者 数	住民10万人当たり
1892	1. 結 核	122,152	259.1
	2. 老 衰	109,658	232.6
	3. 肺 炎	69,846	148.2
	4. 事 故 (中毒を含む)	17,824	37.8
	5. 自 殺	9,681	20.5
1914	1. 循環器疾患	150,032	230.4
	2. 消化器疾患	134,160	206.0
	3. 老 衰	107,770	165.5
	4. 結 核	92,916	142.7
	5. 肺 炎	74,195	113.9

さて、30年後に前記の事情は、どう変わったであろうか。1892—1914年の統計資料から見ると、死因となった疾病の患者数は、第12表⁽¹³⁾の通りで、依然として、結核、肺炎などの呼吸器系疾患が、1892年段階でも、圧倒的に多かったことが分かるが、1912年になると、結核、肺炎の比率が目に見えて減り、代わって、循環器疾患や消化器疾患などの疾患が、首位に踊り出ていることは、注目すべき現象といえよう。第3章(2)で述べたように、水道・下水事業など、首都における市民の住居環境の改善が、かなり顕著に進行したことを、如実に物語るものであろう。またベスト、コレラ、チフス、結核などの伝染病や、産褥熱による死者数が減少したことは、19世紀における細胞病理学の確立や、イギリス人ジョセフ・リスター (1827—1912)、ゼンメルワイス (1818—1865) などによる消毒法の発見などにも、大きく依拠するものであろう。そればかりか、R・コッホ、M・ベッテンコーフェル (1818—1901)、フランス人E・パストゥール (1822—1895)、コッホの弟子 P・ユールリッヒ (1854—1915) などによる細菌学の研究は*、当時の市民たちの衛生環境を大きく改善するのに力があった。

ベルリン地域医療史 1871—1914 (Ⅲ)

* その頃は地方官医であり、やがて1885年以降、ベルリン大学教授(衛生学)となるコッホは、1876年脾脱疽病菌を発見したのについて、結核菌(1882)、コレラ菌(1884)などを相次いで発見、またパストゥールは、1866年、低温殺菌法を発見している。

だが、市民の健康生活は、単に医学のみが増進し得たものではない。政治、都市行政、土木事業、医学など、市民を取り巻く総合的な環境条件の改善が、困難を克服し始めていたと言うべきだろう。ベルリンは1862年当時、漸く「最も健康的な大都市の一つ」と呼称されるようになったとはいえ(第3章)、その衛生状態には、先進都市と比較すれば、まだかなりの遜色が見られ、ベルリンが首都として漸く市民の健康生活を些か増進し得るようになったことを物語るものにすぎない。最も弱い立場の極貧ないしは貧困の婦人層に、鍼寄せは最もヴィヴィッドに現われると思われるので、一例として、次にパリ、ウィーンなどと比較した既婚婦人(15—50歳)の早産率(第13表)⁽¹⁴⁾を掲げておこう。

やや後年になるが、1927年のベルリン地区疾病保険金庫の統計を見ると、患者数の最も多かったのは、①悪性感冒43,452, ②神経痛・神経衰弱26,560, ③リウマチ22,007(他に関節リウマチ3,643), ④結核16,000, ⑤気管支炎 Bronchitis 14,640などが上位を占め、肺炎821は遥かに減少し

第13表 既婚婦人の早産率 1886—97

	Paris 1886-95	Wien 1891-97	Berlin 1886-95
極 貧	14.0	20.0	22.2
貧 困	12.9	16.4	20.6
普 通	11.1	15.5	19.5
普 通 の 上	9.9	15.3	17.8
裕 福	9.4	10.7	14.6
極 め て 裕 福	6.9	7.1	12.2
合 計	11.8	15.3	18.6

て第10位に、また、かつて猛威を振ったチフス33は、第11位に下がっている^{(15)*}。

* 当然のことながら、当時の統計には、癌（がん）L. u. griech, cancer, mhd Krebs の病名は一切挙がっていないが、2000年前ローマの医師セルサスによって乳癌の手術が行われたとの記録がある。Krebsen（這いずり回る）、Krebsschaden（がん）の語句が mhd に入ったのは17世紀後葉、しかもドイツでも「ざりがに」「厄介な弊害」の意味から転用されたようである。統計に現われなかったただだと、理解して置くべきだろう。癌が発見されたのは1775年、イギリスの外科医ポット卿によってであるとされており、それから約200年後の1971年、リヨンで世界保健機構（WHO）国際ガン研究会議が開かれるまで、欧州でも余り研究が進んでいなかったようである。因みに、1979年の旧西独にみる癌の死者は、146,265人（男73,503人、女72,762人）、また癌死亡率は、1912年6.5%であったが、70年代になって20%に上昇している⁽¹⁶⁾。

全ベルリン市の平均寿命*を示した資料がないので、旧市街の中心、シュプレー河畔のシュパンダウ Spandau 地区における乳児死亡率と既婚者死亡年齢の推移（1720—1879年）を、第14表⁽¹⁷⁾に示しておこう。

* 全ドイツ規模では、1871/2—1880/1年に平均寿命、男子35.6歳、女子38.5歳から、1881—1890年には37.2歳と40.3歳、1891—1900年には40.6歳と44.0歳、1901—1910年には44.8歳と48.3歳に伸びた⁽¹⁸⁾。10年きざみの統計から、この期間におけるベルリン市民の平均寿命を類推できようか。

第14表 乳児死亡率と既婚者の死亡年齢の推移
（シュパンダウ地区 1720—1879年）

	1720—	1760—	1800—	1840—	1720—1869/79
乳児死亡率(%)					
男 子	24.6	29.0	24.0	27.9	26.5
女 子	19.4	21.1	18.2	26.6	21.7
既婚者死亡年齢					
男 子	58.9	58.8	59.4	55.5	57.8
女 子	50.9	50.5	57.8	51.0	53.2

② 疾病保険制度の整備

このように、帝制期におけるベルリン市民の健康生活は、当時における政治・行政・土木技術、医学などの進歩に、少なからず負うていたが、住民福祉の向上は、疾病保険と災害保険の充足によって、具体化されることになった。その切っ掛けとなったのは、60年代におけるコレラ、チフスなどの流行であるが、乳幼児死亡数の激増と労働人口の広範な劣化現象が相次いだため、立法・行政などによって公衆衛生に配慮すべきであるという気運が生まれた。そして今や「避け得る疾病」となったコレラ、ジフテリア、チフス、猩紅熱などの伝染病を一掃し、市民の健康生活を守るためには、環境衛生の改善や医療施設の充実は勿論のこと、疾病保険制度の充実もまた不可欠だとの認識が、漸次高まって行った。

そればかりか、60年代にあっては、疾病保険制度は、その直接の存在価値の他にも、さらに重要な意味をもっていた。家族、隣人、組合などの伝統的な相互援助体制のネットワークを補強する代替制度として、目的合理的で長期的な展望に立つ関係諸準則を、労働者が身に付けて行く上で、疾病保険金庫は最上の機会を提供したからである⁽¹⁹⁾。

プロイセンでは、1860年、既に職人金庫 *Gesellenkasse* が2,219（組合員数157,664）と工場労働者金庫 *Fabrikarbeiterkasse* が779（同、170,847）設立されていたが、1874年には、前者が2,710（同、275,145）、また後者は1,931（同、455,583）に激増していた。このように、1883/84年の疾病保険制度 *Krankenkasse* の法的な整備以前から、80年代のプロイセン賃労働者の約半数までが、この保険に加入しており、当時は100万の組合員が加入していたとさえ言われるが、各都市には、疾病保険金庫で働く勤務医師も増えていたという⁽²⁰⁾。第15表⁽²¹⁾と第16表⁽²²⁾は、それぞれ1860—1874年と1900—1913年における社会保険の加入状況（帝国規模）を示す。

ともあれ、この時期における疾病保険制度の充実、市民福祉の向上に

ベルリン地域医療史 1871—1914 (Ⅲ)

第15表 プロイセンにおける社会保険の加入者数 (1860—74年)

年	職 人 金 庫		繊維産業労働者金庫	
	金 庫 数	組 合 員 数	金 庫 数	組 合 員 数
1860	2, 219	157, 664	779	170, 847
1864	2, 273	191, 193	966	248, 712
1865	2, 336	215, 189	1, 050	281, 178
1866	2, 331	196, 330	1, 086	274, 710
1867	2, 343	209, 539	1, 157	311, 891
1868	3, 110	314, 215	1, 452	337, 902
1870	2, 957	234, 771	1, 533	358, 232
1872	2, 819	245, 172	1, 672	431, 079
1874	2, 710	275, 145	1, 931	455, 583

第16表 社会保険の加入者数 (1890—1913年)

(単位：100万人)

年	災 害 保 険	疾 病 保 険	老 齢 ・ 廃 疾 者 保 険
1890	13. 7	6. 6	—
1895	18. 4	7. 5	11. 8
1900	18. 9	9. 5	—
1905	18. 7	11. 9	13. 9
1910	24. 2	14. 0	15. 7
1913	25. 8	14. 6	16. 3

とって、必須な前提条件であった。70年代に労働者はその賃金の0.8%程度の掛け金で疾病保険に加入しえたからである⁽²³⁾。第17表⁽²⁴⁾は、1872—76年における紡績工場の工員たちの賃金と雇用者の疾病保険出資金の状況

第17表 雇用者の疾病保険出資金

年	労 働 者 数	賃 金 総 額	雇用者の疾病 保険出資金	賃金総額との 対比
1872	675	99, 787 Taler	781 Taler	0. 8%
1873	598	106, 683	828	0. 8
1874	645	114, 716	928	0. 8
1876	700	360, 625 M	3, 038 M	0. 8

を示す。

当然のことながら、他の帝国領域と対比して、ベルリン市では、とりわけ多くの市民が疾病保険に加入していたといわれる。この都市には、1880年代には、56の生命・災害保険会社があった。疾病保険制度関係法規施行後の1883年6月に、最大の労働者疾病・死亡金庫 Arbeiterkranken-und Sterbekasse が設立されると、その加入者数(1883年—251,565)は、3年後の1886年、速くも274,875に達し、その内57,157は婦人であったという⁽²⁵⁾。

ついで1890年代になると、ベルリンの疾病保険制度は、一層の充実を見せた。1890年、ミュンヘン生れの「病人の友」アルベルト・コーン Albert Kohn (1857—1926) が、ベルリンの商店員と丁稚の間に、信任者として着任し、労働者の信頼を得て、活発に仕事を始めたからである。1893年、商店員の運動が切っ掛けとなって、この町には商店員と徒弟の為の地域疾病保険金庫 Ortskrankenkasse が生れ、この組織が健保組合活動から社会活動にと、その活動領域を広げるに至っている。1898年、同じコーンの指導のもとに、商人と薬剤師の地域疾病保険金庫 Ortskrankenkasse für den Gewerbebetrieb der Kaufleute, Handelsleute und Apotheker が生まれたことも、看過さるべきではない⁽²⁶⁾。

③ 医療の向上と市民生活

1871—1914年のベルリン市における医療の相対的な向上については、①医療体制の充実の項で述べたが、市民の健康な生活や福祉は、単に環境整備や医療施設の充実、医療の向上によってのみ、保たれ得たわけではない。この時代は、ドイツ資本主義が発展して、第一次大戦にいたるまでの期間の後半、海外進出によって、ドイツ帝国が東の間の繁栄を謳歌した時期であるが、ベルリンの民衆生活にとっては、物価、取り分け食料品価格

の低下は、せめてもの恩恵であった。クチンスキーの分析によれば、日常生活費は、国民レベルで、この期間の後半、漸増しており、1900年を100とする指数で、70年代97、80年代に94、90年代に97、1900/1909年107と推移したのち、第一次大戦直前の1913年には130に達しているが（第18表参照）、ベルリン地域では、食料品価格がかえって低下しつつあり、食肉消費量もドイツ諸都市中の中位だったことも、指摘しておこう（第19表参照）⁽²⁷⁾。1882年、ベルリン市の卸市場における小麦粉、ライ麦パン価格は、著しく値下がりしつつあり、前者の価格は、1882年の100キロ当たり29—30マルクから、1886年に平均22マルクに下がったとの記録がある⁽²⁸⁾。第20表⁽²⁹⁾は、1871—1910年における年齢別の平均余命 *Lebenserwartung* を帝国規模で示したものである。

だが、それにも拘らず、医療や政治・行政の課題は、無限であった。地

第18表 日常生活費（1900=100）

年	指数	年	指数	年	指数	年	指数
1870/79	97	1902	102	1907	114	1910	120
1880/89	94	1903	102	1908	114	1911	124
1890/99	97	1904	103	1909	117	1912	130
1900	100	1905	107	1900/09	107	1913	130
1901	101	1906	113				

第19表 ドイツ各都市における一人当たりの年間食肉消費量（1900—1913年）
（キログラム）

Barmen	39.03	Berlin	60.30
Halle	42.01	Frankfurt a. M.	63.99
Königsberg	45.38	Karlsruhe	67.71
Aachen	46.24	München	73.32
Chemnitz	51.17	Mannheim	79.90
Düsseldorf	54.65	Lübeck	97.66
Erfurt	57.72	Wiesbaden	102.61

第20表 年齢別の平均余命 (1871—1910年)

年 齢	1871/2-1880/1	1881-1890	1891-1900	1901-1910
男 子				
0	35.6	37.2	40.6	44.8
25	35.0	35.8	37.4	38.6
50	18.0	18.4	19.0	19.4
75	5.5	5.6	5.8	6.0
女 子				
0	38.5	40.3	44.0	48.3
25	36.5	37.8	39.4	40.8
50	19.3	19.9	20.6	21.4
75	5.7	5.9	6.1	6.3

第21表 結核を死因とする小児 1万人当たりの死亡率

年	Preussen (6—10歳)	Preussen (11—15歳)	Berlin (6—10歳)	Berlin (11—15歳)
1876	8.53	11.44	10.69	10.47
1902	9.94	11.69	12.55	12.97

域医療は、単なる医学内在的な医療行為の普遍化のみによって保障されるものでなく、人間を取り囲む総合的環境の改善によつてのみ、前進し得る。第21表⁽⁹⁰⁾は、結核を死因とする小児（6—10歳、11—15歳）一万人当たりの死亡数を、プロイセンとベルリンにつき、示したものであるが、1902年当時ですら、ベルリンの衛生環境がなお問題の余地を残していたことを、窺わせる。

《注》

- (1) Chronik der Deutschen, Dortmund: Chronik Verlag, 1983. S. 386, Peter Neumann, op. cit., S. 26.
- (2) Georg Holmsten, op. cit., SS. 263-5.
- (3) EdM, S. 161.

- (4) Statistisches Bundesamt Wiesbaden, Bevölkerung und Wirtschaft 1872-1972. Hrsg. Anlässlich des 100 jährigen Bestehens, Stuttgart u. Mainz : Kohlhammer, 1972, (以下, Statis 1872-1972と略称) S. 125. なお, 統計単位の取り方が違うので, 本文に引用した住民10万人当たりの数字は, 10倍してある。
- (5) dito., S. 124.
- (6) ibid.
- (7) Deutscher Stadttäg (Hrsg.), Statistisches Jahrbuch Deutscher Gemeinden, 66. Jahrgang, Köln : Deutscher Stadttäg, 1979, S. 41.
- (8) Der Fisher Weltalmanach, '90, S. 203.
- (9) Der Fisher Weltalmanach, '91, SS. 212-3.
- (10) dito., S. 270. なお旧東独から出ていたものとしては, Gunnar Winkler (Hrsg.), Lexikon der Sozialpolitik, Berlin : Akademie-Verlag, 1987, SS. 179-24 に, かなり詳細な記述がある。
- (11) 厚生省編『厚生白書』昭和63年版, 246ページ, 同1991年版, 244ページ。厚生省編『厚生統計要覧』昭和63年版, 144—155ページ, 同平成2年版, 145—6ページ, 厚生省編『昭和63年12月31日現在 医師・歯科医師・薬剤師調査』, 平成2, 36—38ページ。
- (12) Virchow, Gesammelte Abhandlungen aus dem Gebiete der öffentlichen Medicin und der Seuchenlehre, 2ter Band, Berlin : Verlag von August Hirschwald, 1879, SS. 329-347.
- (13) Statistisches Bundesamt, Bevölkerung und Wirtschaft, 1872-1972, Stuttgart und Mainz : Verlag W. Kohlhammer, SS. 120-1.
- (14) Friedrich Prinzing, Handbuch der medizinischen Statistik, Zweite vollständig umgearbeitete Auflage, Jena : Verlag von Gustav Fischer, 1930, S. 27.
- (15) dito., S. 228.
- (16) 高山昭三『ガン制圧への道』岩波書店1984, 39ページ, Reclam Etymologisches Wörterbuch, Stuttgart : 1966, Brockhaus Lexikon in 20 Bänden, Band 10, München : 1982.
- (17) Rolf Gehrman, Eintausend Spandauer Familien in 18. u. 19. Jahrhundert in Ribbe (Hrsg), Berlin Forschungen II, Berlin : Colloquium Verlag, 1987, S. 66.
- (18) Jürgen Kuczynski, Geschichte des Alltags des Deutschen Volkes, 1871-1914, Berlin : Akademie Verlag, 1982, S. 421.

- (19) Ute Frevert, *Krankheit als politisches Problem 1770-1880*, Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, S. 17.
- (20) dito., SS. 271-297.
- (21) dito., S. 271.
- (22) Jürgen Kuczynski, *Geschichte des Alltags des deutschen Volks* 4, 1971-1918. Berlin : Akademie Verlag, 1982, S. 374.
- (23) Frevert, op. cit., S. 200.
- (24) ibid.
- (25) *Chronik Berlins*, S. 262.
- (26) *EdM*, S. 260.
- (27) Kuczynski, op. cit., SS. 427-430.
- (28) *Chronik Berlins*, S. 262.
- (29) Kuczynski, op. cit., S. 421.
- (30) dito, S. 398.

む す び

16世紀に布教に來たルイス・フロイスは、日本の医師が「くすし」と呼ばれ、病人を診察するばかりか、「病人に与える薬を調剤することを仕事」としており、「自分の家から薬を届ける」ことを、驚異の目で見ている（『ヨーロッパ文化と日本文化』、岩波文庫）。この例が物語るように、医療行為は古來優れて歴史的・地域的な文化の所産であって、単に技術や知識のみの集積と見るべきではない。

ところで、イヴァン・イリイチ Ivan Illiche が、1976年『脱病院化社会—医療の限界』（英語版 *Limits to Medicine, Medical Nemesis*, 1976, 独語版 *Die Nemesis der Medizin, Von den Grenzen des Gesundheitswesens*, Rowolt, 1981）の冒頭で、鋭く衝撃的に述べているように、19世紀以來、発展・進化して來た現代の「医学機構は、そのものが健康に対する主要な脅威の一つになりつつある」（和訳、金子嗣郎訳、晶文社刊、

1979年)とさえ言われるまでに、こんにち専門化・肥大化して来ている。彼はギリシャ語の *ιατροσ*, *iatros* (医師) と *genesis* (創世記) を語源にもつ言葉 *Iatrogenesis* (医原病時代) を用いて、この社会的な「新しい流行病」が、現代社会のコントロールし難い切実な問題になっていることに、世人の注意を喚起した。イリイチによれば、医原病は、①臨床的医原病 *Klinische Iatrogenesis*, ②社会的医原病 *Soziale Iatrogenesis*, ③文化的医原病 *Kulturelle Iatrogenesis* の三形態を通じて、現代社会に支配的になっているという。もとより、こんにち医療の細分化・専門化、精密化の動きは、医療を飛躍的に発展させて来たが、同時に、精神と身体とに峻別し、マテリアライズした余りに、逆に人間を見えなくする病弊を一般化して来ている。中村雄二郎は、『臨床の知とは何か』の中で、「(病院と学校が) ともに<価値の制度化>という現代の病弊」(岩波新書 1992 年) に侵されており、「人間的価値の制度化、つまり惰性的形骸化」が進行したため、人間の痛みを、操作可能な単なる技術の次元に還元してしまったと、鋭く指摘している。

現在、学校といい病院といい、わたしどもが、その多年抛ってきたデカルト的合理主義の限界は、中村の言うように、今や新たに問い直され始めるに至っている。もっとも「時代の子」である庶民にとっては、よしんば時代の科学や制度が十全ならずとも、それに依拠せざるをえず、所与の条件のもとで、それぞれが懸命・切実に生きる他なかったであろうが。グラデュアルにしか進歩し得ない科学と生を求める人間の相剋は、いま始まった訳ではないが、地域医療史も、思えば、そんな一里塚ないしは一行程と言えるであろう。

言うまでもなく、地域医療問題は、まさに現代社会の深刻・壮大なアボリアの一つであって、よく一研究者の解決し得るところでなく、江湖の力の結集が期待されるが、本稿は、そんな問題意識から、もともと生まれ

た。背骨のへし折れるほど壮大な問題を、近代医学の生い立ちのときに立ち返って、些かなりとも、ことの原初から考察したいと考えたからである。本稿で私が試みたのは、冒頭に述べたように、第二帝制期において、ベルリン市が市民生活に何を保障し得ていたかの史的分析にすぎないが、とりわけ、1870年代、すなわち帝国建設期から数年間におけるこの市の町づくり史は、この町の市民福祉生活にとって、礎石的な意味をもっていたことに、注意を喚起したい。医師であり政治家であったフィルヒョーが、市長A・ホブレヒト、土木技師J・ホブレヒトの兄弟などの協力を得て行ったこの都市改造は、その意味からみて、極めて象徴的な事績と思われる。

またフィルヒョーが、「政治は大規模な医学そのものである」と述べ、27歳当時の1848年、「医学は社会科学である」との理念を逸早く打ち出していた(E. H. Ackerknecht, Beiträge zur Geschichte der Medizinalreform von 1848, in: Sudhoff's Archiv für Geschichte der Medizin, XXV.) ことにも、注目すべきではなかろうか。コッカ Jürgen Kocka の弟子である U. フレーベルト Frevert が近著『政治問題としての疾病』Krankheit als politisch Problem 1770–1880, Göttingen 1984の中でいみじくも指摘しているように、疾病は「政治問題」でもあって、単に医学的・自然科学的な分析対象であるに止まらず、すぐれて政治学的、政治史的ないしは社会科学的な討尋の対象でなければならないであろう。言うまでもなく、こんにち、諸学は極めて学際的・総合的であって、専門的なトリビアリズムでは、問題の本質に答えられなくなっている。その意味で、この10年来、日常史ないしは社会史的な研究に盛んであった西独史学界の若手世代、しかも婦人研究者の中から、前記のように秀れた仕事が現れたことは、画期的なことと言えるであろう。地域医療問題は、教育問題や文化問題と並んで、人間存在そのものや、その福祉に文字どおり係わる切実性を

もち、まさに現下の究極的な課題と言わざるを得ない。そこでは、もちろん政治理念の質の高さや経済的な豊かさの保障、更には、法制度などの改革が、前提条件とされるが、個々の科学は、それがよしんば、いかに専門的・細分的であるにせよ、まさに部分的な寄与を為し得るにすぎない。フィルヒョーは、単なる「細胞病理学者」として優れた医師であったのではなく、彼は同時に政治家であり、自治体政策家であって、むしろ「社会科学」の一環として、医学を構想したことに卓拔さがあり、彼の本領があった。フィルヒョーは、その意味で、優れて現代的・人間的な「医師」であり、イデアリストであった。彼がこんち振り返られるべき理由は、そこにある。

医療政策と国家・地域における社会保障の視点からみると、地域医療史はまさに政治史的な検討課題でもあると、私は考える。在来、医療史は医療史家によって、また政治史家は政党史や社会労働史の角度から、専ら研究を続けるのが通例であったが、地域医療史研究は、医療史家との共業の時代に、もう差し掛かっているのではないか。

ベルリンは、強力な産業化の結果、1872年までのいわゆる「嵐のような光彩淋漓の株式会社氾濫時代 Gründerjahre」に、急速に発展した。

(Klaus Liedtke Hrsg. Das ist Berlin!, Die neue deutsch Hauptstadt u. ihre Geschichte, Berliner Zeitung, 1992)そして、その後は、王都としての軍事史的な観点から、発展させられ、補強された。近年、ドイツの研究者(歴史家、法制史家、建築家など)の間にベルリン史の多角的な研究が盛んであるのは、リッペの言うように、「在来自由にし得なかった史料」がかなり出始めている今日、「都市というものの歴史的な発展の総てを殆ど犠牲にして急成長した」19世紀以降のベルリン市の発展が、「過去との仕事の繋がりを許さなかった」立ち遅れはあるにしても、実に壮観という他ない (Stadtgeschichte als Kuturarbeit, Beiträge zur Geschichts-

praxis in Berlin-Ost. West, Berlin: Stapp Verlag, 1991)。本書は、1990年6月に行われた「新ベルリンの都市史と発展」と題するシンポジウムの報告文書で、職業や専門分野を異にする多彩な若手研究者の文字通りのプラクシスであるが、同年3月の Historischen Kommission zu Berlin シンポジウムの文書記録 (Wolfgang Ribbe/Jürgen Schäddeke Hrsg., Berlin im Europa der Neuzeit, Ein Tagungsberichte, Berlin: Walter de Gruyter, 1990) と並んで、この数年来続けられて来たこの国のベルリン史研究の裾野の広さを、痛感させる。両書ばかりでなく、この数年の研究成果を示す文献類は、目下ドイツで続々と公刊されているので、とても追い切れないほどである。その紹介は、またの機会に譲ることにして、ともあれ本稿を閉じたい。